

夜泣き鉄骨

海野十三

青空文庫

真夜中に、第九工場の大鉄骨が、キーツと声を立てて泣く――

という噂が、チラリと、わしの耳に、入った。

「そんな、莫迦な話が、あるもんか！」

わしは、検査ハンマーを振る手を停めて、カラカラと笑った。

「そう笑いなさるけどナ、組長さん」その噂を持つてきた職工は、慄えた眼を、わしの方に向けて云った。「昨夜のことなんだよ、それは……。火の番の、常爺が、両方の耳で、たしかに、そいつを聴いたよって、蒼い顔をして、此のおいらに話したんだ。満更、偽りを云っているんだア、思えねえ」

いつの間にか、わし達の周りには、大勢の職工が、集つてきた。

「組長さん、それア本当なんだ」別の声が叫んだ。

「なんだとオ――」おれは、その声のする方を見た。「てめえは、雲的だな。雲的とも

あろうものが、かるはずみ軽卒なことを喋つて、後で笑れんな」

「大丈夫ですよ——」うんてき雲的は大いに自信ありげに、言葉をかえした。「それについてちや、ちいつとばかり、てめえ手前の恥も、さら曝けださにやならねえが、もう五日ほど前のことでさア。

よあかししようぶ徹夜勝負のそれが、十二時を過ぎたばかりに、スツカラカンでヨ、場に貸してやろう

てえ親切者もなしサ、やむなく、工場の宿しゆくちよく直、たあさんのところへ、真夜中というの

に、むしん無心に来たというわけ。さ、その無心を叶えて貰つての帰りさ、通り懸つたのが今話

しの第九工場の横手。だしぬけに、キーツというきし軋るような物音を聴いた。(オヤ、何

処だろう)と、あつしは立停つた。たちどま暫くは、何にも音がしねえ。(空耳そらみみかな?)と思

つて、歩きだそうとすると、そこへ、キーツとな、又聞えたじゃねえか。物音のする場

所は、たしかに判つた。第九工場の内部からだッ。(何の音だろう? 夜業やぎようをやつてん

のかな)そう思つたのであつしは、顔をあげて、硝子の貼つてある工場の高窓を見上げた

んだが、内部は真暗まっくらと見えて、なんの光もうつらない。(こりや、変だ!)にわか俄に背筋が、

ゾクゾクと寒くなつてきた。そこへ又その怪しい物音が……。こわ恐いとなると、なほ尚聴きたい。

重い鉄扉てつびに耳朶みみたぶをおつつけて、あつシア、たしかに聴いた。キーツ、カンカンカン、

硬い金属が、きし軋み合い、噛み合うような、鋭い悲鳴だった」

「大方、工場に、鼠ねずみが暴れてるんだろう」わしは、不機嫌に云い放った。

「どうして、組長！」雲うんてき的はハッキリ軽けいべつ蔑の色を見せて、叫びかえした。「あつしにア、あの物音が、どこから起るのか、ちやんと見当がついてるのでサ」

「ンじゃ、早く喋しゃべれツてことよ」

「こう、みんなも聴けよ」彼は、周囲まわりの南瓜面かぼちやつらを、ズーツと睨ねめまわした。「ありやナ、

クレーンが、動いている音さ！」

「なに、クレーンが!!」

一同が、思わず声を合わせて、叫んだ。

クレーンというのは、格納庫かくのうこのように巨大な、あの第九工場の内部へ入って、高さが百尺近い天井を見上げると判るのだが、そこには逞たくましい鉄骨で組立てられた大きな橋きょう梁ようのような形の起重車きじゆうしゃが、南北の方向に渡しかけられている。それが、クレーンだつた。その橋梁の下には、重い物体をひっかける化物ばけもののようにでつかい鉤かぎが、太い撚より鋼くわ線せんで吊つつてあり、また橋梁の一隅いちぐうには、鉄板てつばんで囲こった小屋が載のつていて、その中には、このクレーンを動かすモートルと其の制動機せいどうきとが据すえてあつた。制動機を動かすと、この鉄橋は、あたかも川の中で箸はしを横に流すように、広い第九工場の東端とうたんから西端せいたんまで、

ゴーツと音をたてて横に動くのだった。

「おい、政まさツ！」わしは、クレーンの運転手をやっている男を、人垣の中に呼んだ。

「へえ——」政は、紙のように、白い顔をして、おずおずと、前へ出てきた。

「クレーンが、真夜中に動き出すのは、本当かな」

「わたしは、なんなんにも、存ぞんじませんです。しかし、クレーンのスイッチは、必ず切つて帰りますで、真夜中に、ヒヨロヒヨロ動き出すなんて、そんな妙なことが……」

そこまで云つた政は、発ほっさ作さくみたいな様子となり、言葉のあとをブツブツ口の中で呟つぶやいて、それから急に気がついたかのように、ワナワナ慄える両手を、周あわ章わてて背後に隠したのだった。

「よおし。今夜は、一つ正しょうた体を確かめてやろう。いいか、みんな夜中の十二時を廻つたら、裏門前に集るんだ！」

合宿所の、三階の、廊下を、パタパタと音をさせて、近づいてくる蹠音があつた。

「組長さん、おいですか——」

その蹠音は、「舎監居間」と書いた木札を、釘で打ちつけてあるわしの室の入口の前で停るが早いのか、そう、声をかけたのだつた。

「おう。誰かい」

「栗原です。倉庫係の栗原ですて」

「栗原？ 栗原が、なんの用だツ」

「へえ、ちよつと工場の用なんで……」

「なにツ。工場の用で、どんなことだか云つてみる」

「へえ、実は——」栗原は、言い淀んでいる風だつた。「先日お持ちになりました乙型スウィッチが、急に入用になりましたんで、いただきに参つたんですが……」

「スウィッチなんか、明日にしろ」

「ところが生憎、工場以至急使うことになつたんで、直ぐ持つて行かないと困るんで、実にその……」

「よオし、いま入口を開けるから、ちよつと待て」

暫くして、わしは、入口の扉とを、サツと開けた。

「どうも相済あひすみません」栗原は、わしの顔を見るなり、ペコリと頭を下げた。

「お前、この間、そう云つたじゃねえか。このスウィッチは、当分とうぶん不用ふようだから、いつまでもお使いなさい、とな」

「申訳がありませんです」栗原は、ひどく恐縮きようしゆくしている態ていで、ペコペコ頭を下げた。

「組長さんは、スウィッチの図面を書きたいから御持ちになるといので、そんな簡単な御用ごようならと、栗原は帳簿ざんぼに書かないで、御貸ごかしたんです。ところが、今急に、拡張かくちよう

工事係こうじけいの方から、在庫ざいこになつてゐる乙型おつがたスウィッチは全部数を揃そろえて出せという命令めいれいな
んで。どうも已やむを得えず、ソノ……」

「文句はいいや。さア、早く持つてゆけ」

わしは、抱かかえていた乙型スウィッチを、彼の前に、さしだした。

乙型スウィッチというのは、長さ一尺五寸、幅七寸の、細長い木箱きばこに収められた大きなスウィッチで、硝子蓋ガラスを開くと、大理石だいりせきの底盤ていばんの上に幅の広い銅リボンどうでできた電気断続用だんぞくようの刃はがテカテカ光り、エボナイト製の、しっかりした把手ハンドルがついていた。この

スウィッチ一つで、鳥渡ちよつとしたモーターの開閉は充分できるのであった。

「栗原さん、俺が持つてゆくよ」

横の方から、思いがけない、違った声がして、頭髪かみのけをモシヤモシヤにした若い男が、姿を現した。

「だッ、誰だ。手前は……」

わしは、戸口の蔭から、イキナリ飛び出した男に、駭おどろいた。

「こいつは、横瀬よこせといましてネ」若い男の代りに栗原が弁解した。「この栗原の遠縁とおえんのものです」

「何故ひつぱってきたんだ」

「いまお願いして、倉庫で、私の下を働かせて、いただいてるのです。というのは、下したま町の薬種屋やくしゆやで働いていたのが、馘首くびになりましたナ、栗原のところへ、転りころがこんできたのです」

「ふうん、お前さん、薬屋かア」

珍らしそうに、スウィッチの表や裏を、眺めている若い男に、わしは、声をかけた。

「薬屋だったんです」その横瀬は、ぶつきら棒の返事をした。

「どうだろうな。わしは、お前さんに、ちよつと頼みたいことがあるんだが」

「骨の折れねえことなら、手伝いますよ」

「これッ——」栗原が駭おどろいて、横瀬の汚い職工服を、ひっぱった。

「骨は折れねえことだ。じゃ、栗原、お前の若い衆を、ちよいと借りたぜ」

「へえ、ようがす」

栗原は、若い横瀬から、スイッチの箱をうけとると一人で帰って行ったのだった。

「さあ、こつちへ、入んねえ」

「はあ——」

「わしは、鳥渡ちよつと、お前さんに、見て貰いてえものがあるんだ」

「俺に、判るかなア」

「ものは、これなんだ」わしは、机の抽斗ひきだしの奥から、新聞紙にくるんだものを、出して

きた。

「この硝子ガラスで出来たものはなんだね」わしは、それを横瀬に手渡した。

「これは、注射器の一部分ですよ」

「注射器？　そうだろうな、わしも、そう思った。それで、何の注射器か、お前さんに判

らないかい」

「さア——」横瀬は、モシヤモシヤ頭髪かみのけを、指でゴシゴシ搔かいた。「注射器は判るが、尖端さきについている針が無いから、見当けんとうがつかねえ」

「じゃ、此処ここんとこを見て呉れ。この注射器の底に、ほんのり茶っぽいものが附いているが、これは、なんて薬かい」

「うん、なんか附いてはいるが——」若い男は注射器を、明り窓の方に透すかして、その茶色の汚点おてんに眺め入った。「電灯は点きませんか」

「生憎あいにく、この合宿じゃ、六時にならないと、点かないんだ。まだ三十分も間があるよ」
初夏しよかの夕方は、五時半を廻つても、まだ大分明るかった。

「さあ、わかりませんね。こんなに分量が少くちや見当がつかない。薬品のようにもありません。血痕けっこんのようでもあり……」

わしは、グツと唾つばを呑みこんだ。

「もう一つ、見て貰いたいものがある」わしは、新聞紙包みの中から、もう一つの品物を取り出した。「これは何かね」

「こんなもの、どっから持って来たんです」横瀬は、ピカピカ光る、その外科道具のよう

なものを手に取上げ、ニヤニヤ笑いだした。

「何に使う品物かね」わしは、横瀬の質問には答えようとせず、同じことを、聞きかえしたのだった。

「一口に云えば——」と、わしの顔をジロリと見て、「子宮鏡しきゅうきょうという、産婦人科の道具だね」

「よし、判った」わしは、ピカピカするそれを、横瀬の手から、ひったくるようにして、元の新聞紙の中に、包んでしまった。

「いや、御苦労だった」と、わしは挨拶あいさつをした。「ところで、もう一つだけ、お前さんに見て貰いたいものがあるんだが」

「あるんなら、早く出しなせえ」

横瀬は、面倒くさそうに、云った。

「ここには、無いんだ。ちよつと、近所まで附合つてくれ」

「ようがす。ドッコイショ」

横瀬は、「ひびき」を一本、衣ポケット囊から出して口に銜くわえると、火も点けないで、室内をジロジロと、眺めまわした。

「何を見てるんだ」わしは、訊いた。
「マッチは無いのかね」と彼は云った。

3

合宿の門を出ると、溝くさい露路に、夕方の、気ぜわしい人の往来があつた。初夏とは云つても、遅れた梅雨の、湿りがトツプリ、長坂塀に浸みこんで、そこを毎日通つていゝる工場街の人々の心を、いよいよ重くして行つた。

道では、逢う誰彼が、挨拶をして行つた。

向うから、見覚えのある若い女が、小さい風呂敷包みを抱えてやってきた。

「お前さん」と其の女は、わしの連れを、チラリと睨みながら、云つた。「これから、何処へゆくんだい」

「お前こそ、どこへ行くんだい」

「ふん、見れば判るじやないか。今夜は、徹夜作業があるんだよ」

「夜業か。まアしつかり、やんねえ」

「お前さんの方は、どこへ行くのさア」その女は、一步近よって、云った。

「ちよいと、この仁と、用達しに」

「そうかい、あのネ」女は、口を、わしの耳に近づけて、連れに聞かせたくない言葉を囁いた。

「……」わしは、黙って、肯いた。

女に別れると、後から、附いてくる横瀬がわしに声をかけた。

「今の若いひとは、なかなか、美しい女ですネ」

「そうかね」

「何て名前です」

「おせい」

「大将の、なにに当るんです」

「馬鹿！」

露路を二三度、曲った末に、わし達は、目的の家の前へ来たのだった。

わしは、雨戸を引かれた、表の格子窓こうしまどに近づいて、家の内部の様子を窺うかがった。幸さいわいこのところは、露路裏ろじりの、そのまた裏になつてゐる袋小路ふくろこうじのこととて、人通りも無く、この怪あやしげな振舞ふるまいも、人に咎とがめられることがなかつた。とにかく、家は留守と見えて、なんの物音ものねもしなかつた。わしは、連つれを促うながして、裏手に廻まわつた。

勝手元ひきどの引戸ひきどに、家の割わりには、たいへん頑がんじよう丈ちゆうで大きい錠じようまえ前まへが、懸かかつてゐた。わしは、懐ふところ中ちゆうを探たづねて、一つの鍵かぎをとり出すと、鍵孔かぎあなにさしこんで、ぐつとねじつた。錠前じようまえは、カチャリと、もの高い音をたてて、外れたのだつた。

わしは、後あとを見て、横瀬よこせに、家の中へ入るやうに、目くばせをした。

障子しょうじと襖ふすまとを、一つ一つ開けて行つたが、果して、誰も居なかつた。若い女の体たいしゆ臭におが、プーンと漂ただよつてゐた。壁にかけてあるセルの单衣ひとえに、合あわせてある桃色の襦袢じゆばんの襟えりが、重おも苦くしく艶なまめいて見えた。

「いいのかね。こう上りこんでいても」

横瀬よこせは、さすがに、気が引ひけているらしかつた。

「叱しツ——」わしは、睨にらみつけた。

わしは、逡巡しゆんじゆんするところなく、押入おしりをあけた。上の段に入いつてゐる蒲団ふとんを、静しずかに

下ろすと、その段の上に登った。そして、一番端の天井の板を、ソツと横に滑らせた。そこには、幅一尺ほどの、長方形の、真暗な窖あなぐらがポツカリ明いた。そこでわしは、両手を差入れて、天井裏を探ぐったが、思うものは、直ぐ手先に触れた。手文庫てぶんこらしい古ぼけた函はこを一つ抱かかえ下ろしてきたときには、横瀬は呆気あつけにとられたような顔をしていた。

わしは、急製の薄っぺらな鍵を、紙入の中から取出すと、その手文庫を、何なく開くことに、成功したのだった。その中には、貯金帳や、戸籍謄本こせきとうほんらしいものや、黴かびの生えた写真や、其他そのた二三冊の絵本などが入っていたが、わしが横瀬の前へ取出したものは、手文庫いちぐうの一隅いづこに立ててあった二〇ccいり入の硝子壺ガラスびんだった。それには、底の方に、三分の一ばかりの黒い液体が残っていた。

「さア、こいつだ」わしはソツと壺を横瀬に渡した。「最後に、お前さんから、教えて貰いたいのには」

「そうだね、これは——」横瀬は、十燭しよくの電灯の光の下に、小さい薬壺を、ふってみながら、いつまでも、後を云わなかった。

「判らねえのかい」

「うんにゃ、判らねえことも、ねえけれど」

「じゃ、何て薬だい」

「そいつは、云うのを憚る——」
はばか

「教えねえというのだな」

「仕方が無い。これア薬屋仲間ごはつとで、御法度の薬品なんだ」

「御法度であろうと無かろうと、わしは、訊きかにや、唯ただでは置かねえ」

「脅かしたこなしにしましようぜ、組長さん。そんなら云うが、この薬の働きはねえ、人

間の柔い皮膚を浸しん蝕しよくする力がある」

「そうか、柔い皮膚を、抉えぐりとるのだな」

「それ以上は、言えねえ」

「ンじゃ、先刻みせた注射器の底に残っていた茶色の附着物ふちやくぶつは、この薬じゃなかったか

い」

「さア、どうかね。これは元々茶褐色の液体なんだ。ほら、振ってみると、硝子のところに、茶つばい色が見えるだろう」

「それとも、やつぱりあれは、血のあとか。いや大きに、御苦勞だった。こいつは、少ないが、当座とんざのお礼だ」

そう云つて、わしは、十円紙幣を、横瀬の手に握らせ、今日のことは、堅く口止めだといふことを、云いきかせたのだつた。

4

いよいよ、夜は更けわたつた。

月のない、真暗な夜だつた。風も無い、死んだように寂しい真夜中だつた。

かねて手筈のとおり、工場の門衛番所に、柱時計が十二の濁音を、ボーン、ボーンと鳴り終るころ、組下の若者が、十名あまり、集つてきた。わしは、一と通りの探險注意を与える、一行の先頭に立ち、静かに、構内を、第九工場に向つて、行進を始めたのだつた。地上を匍うレールの上には、既に、冷い夜露が、しつとりと、下りていた。

「電纜工場は、夜業をやつてるぜ」

「満洲へ至急に納めるので、忙しいのじゃ」

誰かの声に、そつちを見ると、電纜工場だけが、睡り男の心臓のように、生きていた。高い、真黒な大屋根の上へ、鉛なまりを鎔とかす炉ろの熱火ねつかが、赫々あかあかと反射あかしていた。赤ともつかず、黄ともつかぬ其その凄まじい色彩すざは、湯のように沸たぎつている熔融炉ようゆうろの、高温度を、警告けいごしているかのようであつた。

「組長さん」組下の源太が云つた。「おせいさんは、もう身体は、いいのですかい」

おせいめかけは、実は、わしの妾めかけだつた、だが、世の中の妾とは違つて、昼間は、この工場ケイブルペーパーで働かせ、わしの顔で、電纜ケイブルの紙捲ペーパーきという軽い仕事をやらせ、日給は、女性として最高に近いものを、会社から払わせてあつた。夜になると、身粧みつくろいをして、合宿から抜け出してくるわしを迎えて、普通の妾となつた。

「うん、もういいようだ。今夜も、あの電纜工場ケイブルで、稼かせいでいる位だア」

「うふ。組長は、万事ばんじぬかりが、ねえな」

「なんだとオ——」わしは、ピリピリする神経を、やつとのことで抑おさえつけた。「ちよつと電纜工場ケイブルへ寄つてくるから、五分間ほど、ここで待つていて呉くれ」

わしは、間もなく出てきた。

電纜工場を通りすぎると、その先は、文字どおりに、無人郷であつた。

漆黒しつこくの夜空の下に、巨大な建物が、黙々もくもくとして、立ち並んでいた。饅すえくさい鏝さびて鉄てつの匂においが、プーンと鼻を刺戟した。いつとはなしに、一行は、ぴったりと寄り添い、足音を忍ばせて歩いていった。

「うわッ！」

建物の軒下を伝い歩いてきた男が、悲鳴をあげた。皆は、ギョツと、立ち停った。

「な、な、なんだッ」

「工場に、墓がまがえるが出るなんて、知らなかったもんで……」

きまりわるそうな、低い声だった、

「ドーン」

二三間先の、鉄扉てつびが、鈍い音を立てて鳴った。

「ウウ、出たッ！」

「や、喧やかましいやい！」

わしは唳どな鳴った。墓がまがえるを蹴飛ばした先生は、黙っていた。

ひい、ふう、みっつ！

やっと、第九工場の、入口が見える。

ぼツと、丸い懐中電灯の光の輪がぶつつかった。

錠前には、異常がない。門衛から借りてきた鍵で、それを外はずさせた。ガチャリと、錠の開いたのが、骨の崩れる音のようだった。

「さア皆、懐中電灯を消すんだ」わしは扉との前に突立って云った。「静かに、中へもぐりこんだら、たとえ、どんな吃驚びつくりするようなことが起ろうと、声を立てちや、ならねえ。よしかツ。懐中電灯も、わしが命令するまでは、どんなことがあつても、点つけるなよツ。折角せつかくの化物を、遁にがしちまうからな。いいかツ」

一同は、それぞれ、肯うなずいた。

重い鉄扉を、細目にあけて、ブルブルふる慄えている組下連中を、一人一人、押込んだ。最後にわしが入って、扉をソツと閉めた。

工場こうばの中は、油の匂いが、プンプンしていた。そして、鼻をつままれても判らぬほど、絶対暗黒ぜつたいあんこくであつた。何かしら、闇の中から、大きな手が出てきて、喉首のどくびをグツと締めつけられるような気味の悪い圧力を感じたのだった。

誰もが、黙っていた。番号をかけるわけにもゆかない。わしは、戸口のところから、手さぐりに、一人、二人と、人間の身体を数かぞえて行つた。彼等は、わしの手が触さわる度たびに、非

常に驚愕きょうがくしている様子であつた。そして、申し合わせたように、隣り同士がピタリと身体を寄せ、手を繋ぎつな合わせていた。

「十三人！」たしかに、全員が、入口に近い壁際かべぎわに、鯡ひらめのように、ピッタリ、附着してゐるのであつた。

それから、時タイムが軸の上を、静かに移つてゆくのが、誰にもハッキリと感ぜられた。時の経つのに随したがつて、一秒また一秒と、恐怖の水準線すいじゆんせんが、グイグイと昇つてくるのだつた。二分、三分、四分、五分――

夢中で、隣りの男の手を、握りしめた。冷い汗が、腋わきの下に滲にじみ出して、臆やがてタラリと肋骨あばらほねを、駆け下りた。

「キーンツ」

一同は、はツと、呼吸いきをつめた。

「キーンツ、キーンツ」

呀あツ、いよいよ、泣きだしたのだ。彼等はそれを鼓膜こまくの底に聴いた瞬間、板のように全身を硬直させた。

「キーンツ、キーンツ、ぐうツ、ぐうツ」

彼等は、見えない眼を閉じた。

「キ、キ、キ、キ、キイツ」

もう堪りかねたものか、一行のうちから、サツと、懐中電灯の光芒が、射るように、高い天井を照した。

「がーッ、がーッ……」

一同は、その怪音のする方を、等しく見上げた。

「呀ッ！」

「ク、クレーンが……」

懐中電灯の薄ら明りに、はじめて照し出された怪物は何であつたろうか。それはあの巨大な鉄骨で組立てられたクレーンが、物凄じい響きをあげて、呀ッという間に、全速力で一同の頭上を通り過ぎたのであつた。

「ひえーッ」

というなり、彼等は、折角手にした懐中電灯も其場に抛り出して、云いあわせたように、ペタペタと、地上に尻餅をついてしまった。

「電灯を、点けろッ」

わしは、クレーンがまだ動いている裡うちだったが、決心をして、号令をかけた。そして真先に、懐中電灯を照して、一同の方へ向けた。彼等の顔は、いずれも、泣かんばかりの表情をして見えた。

「しつかりしろ、探険は、これからだツ」

わしは、一同を激励げきれいした。

皆の懐中電灯が、揃って点くと、大分場だいぶんばうない内ないが明るくなつて、元気がついたようだった。

「クレーンを動かすスイッチが、入っているかどうかを調べるんだ。オイ、政まさはいるかツ」わしは、クレーン係の、若い男を呼んだ。

「へええ」と政は、死人のような顔を、こつちへ向けた。「どうか、その役割は、勘弁しとくんない」そう云つて、彼は、手を合わせて、こつちを拝おがんだ。

「莫迦ばかいうな」わしは叱りつけた。「手前てまえが、調べねえじゃ、係りで無えコチトラには訳が判らねえじゃねえか」

尻りよう込みする政を、両脇りようわきから引立てて、捜査に取懸った。

「このスイッチは、開いている」一同が入った入口の側の壁上で、その入口から六、七

間奥まったところに大きいスイッチが取附けられてあつた。その硝子蓋ガラスぶたの上から指しゆびさながら、クレーン係の政が呻うなつた。「このスイッチが、開いているなら、クレーンの上へ、電気が行きつこ無いんです」

「だが可怪おかしいぞ」とわしは云つた。「クレーンは確かに動いたんだ。クレーンはモートルでしか動けないんだ。このスイッチが開いていて動く筈はない。開いているようでも何処か、電気が通うようになってるんじゃないか。よく中を開けて調べて見ろ」

カチャカチャと音をさせて、スイッチの硝子蓋を開いてみたが、それは普通のスイッチが、明らかに開かれた状態になつていて、外にインチキな接続は発見せられなかつた。「たしかに、このスイッチは開いています」政は泣き声で云つた。

「よし、では念のために、クレーンの上へ昇ってみよう」わしは云つた。

「なに、クレーンへ昇る——」

一同は、互たがいに顔を見合わせて、恐怖の色を濃こくした。

「政、昇れ！」

「いやア、救たすけて下さい」政は、ポロポロ涙なみだを出して、喚わめくのであつた。

「じゃ、わしが先登せんとうに昇るから、直ぐうしろから、ついて来い。いいかつ」

わしはそういうなり、壁際へ進んで、クレーンに攀じ昇る冷たい鉄梯子へ、手をかけた。

5

「矢張り、クレーンのスイッチも、開いています」

三人の男にさんざん世話をやかせ、漸くわしのあとから、クレーンの上まで担ぎあげられた政は、モートルの横の、配電盤をひと目見ると、恐ろしそうに、そう云った。

「そうか。確かに、それと間違いが無けりや、降りることにしよう」

わし達は、また困難な鉄梯子を、永い時間かかって、一段一段と、下りて行った。

下まで降りきらない裡から、残っていた連中は、クレーンの上のスイッチが開いていたか、どうかについて、尋ねるのであった。

「政に見て貰ったがな」わしは一同の顔を、ずッと見廻した。

「クレーンのスイッチも開いていたよ」

「それじゃ、いよいよあのクレーンは……」そこまで云った職工の一人は、自ら恐ろしくなつて、言葉を切つてしまった。

「……電気の方で動いたのでは無い、ということになる」とわしは、代りに、云つた。

「誰が、動かしたんだッ」

「上つて、四方しほうに気をつけて見たが、隠れてる人間も居なかつた。なア、源太げんた、友三ともぞう、雲うんてき的てき」

「そうだ、そうだ」

「もつとも、人間一人で動くようなクレーンじゃない」

「ああ、すると誰が動かしたんだ」

「組長さん。もう我慢が出来なくなつた。どうか、ここから出して下せえ」

「俺も、出るッ」

「いや、出ることならぬ」わしは呶どな鳴つた。「クレーンを動かした者が、判らぬ限り」

「組長さん、そりや無理だよ」源太が泣き声を出した。「ありや、生きてる人間のせいじゃないんだ」

「なんだとオ——」

「あのクレーンには、何か怨^{おんり}霊^{りょう}が憑^ついていて、そいつがクレーンの上で、泣いたり、クレーンを動かしたりするんだ」

「ああッ——」

それを聞くと、誰もが、痛いところへ触^{さわ}られたように、跳^とび上^あって駭^{おどろ}いた。

「おお、組長」雲^{うんてき}的^{てき}が云^いった。「誰^{たれ}かが、外^{そと}で喚^{わめ}いているようですぜ」

「なに、外^{そと}で喚^{わめ}いているッ」わしは、予^よ期^きしないことに吃^{びつくり}驚^{おどろ}して云^いった。なるほど、多^{おほ}勢^せの声^{こゑ}で、何^{なに}やら喚^{わめ}いているのが、遙^{はる}かに聞^きこえるのであつた。「じゃ、みんな、外^{そと}へ出^でよう」

一同^{いどう}は、ワツと云^いつて、入口^{いりぐち}の扉^との方^{かた}へ、先^{まづ}を争^あつて駆^かけだした。ガラガラと、重^{おも}い鉄^て扉^びが、遠^{えん}慮^{りよ}会^え積^{じやく}なく、引^ひき開^{ひら}けられる物^{もの}音^ねがした。

「おう、組長、大^{おほ}変^{へん}だア」疝^{かん}高^{たか}い声^{こゑ}で叫^{こゑ}ぶものがある。

わしは、ギクリとした。

「組長」わしの胸^{むなぐら}倉^{くら}に紐^{すな}りついたのは、電^{でん}ケーブル工^{こう}場^{じょう}の伍^ご長^{ちやう}をしていいる男^{おとこ}だつた。「おせいさんが、大^{おほ}変^{へん}だッ」

「なに、おせいが、一^{いっ}体^{たい}どうしたというんだ」

「おせいさんが——」伍長は、苦しうに言い淀んだ。「おせいさんが、熔融炉へ、真逆かさまに、飛びこんでしまった」

「熔融炉へ、飛びこんだ、というのかッ」

わしは、それを聞くなり、おせいの働いていた電纜工場めがけて、矢のように駆け出した。

わしのあとには、組下のものや、惨事さんじを報せしらに來た連中が、バタバタと追いついて來るのであった。

電纜工場の入口を一步入ると、凄惨せいさん極まりなき事件の、息詰まるような雰囲気ふんいきが、感ぜられるのだった。皎々こうこうたる水銀灯の光の下で仕事をする人々は、技師といわず、職工といわず、場内の一隅いちぐうに据えられた、高さ五十尺の太い熔融炉キユーボラの周囲まわりを取巻いて、一斉に上を見上げていた。熔融炉の側には、松の樹をたお仆したような大電纜だいケーブルが、長々と横よこわつていたが、これは忘れられたように誰一人ついているものは無かつた。

「駄目だア、何にも見え見え」

「着物の端も、残つていねえよ」

そんなことを叫びながら、熔融炉の頂上に昇つていたらしい男工だんこう達が、悲痛な面持を

して降りて来た。白い手術着を着て駆けつけた医務部の連中も、形のない怪我人に対して、策の施しようも無く、皆と一緒に、まごまごしているだけだった。

「どうも、お気の毒でしたが」工場長が、わしの傍へ近づくと、興奮した語調で云った。

「気がついたときは、おせいさんが、もう熔融炉の、殆んど頂上まで、昇っていたんです。でも、それと気がついて、（停めろ、下りろ）と、下から叫びましたが、何も聞えない風で、アレヨ、アレヨと云っているうちに、火焰の中へ飛びこまれたようなわけで……」

わしは、云うべき言葉もなかった。

「おせいさんは、覚悟の自殺を、やったらしいですよ。どうした訳か判りませんが」この工場の組長が、続いて口を挟んだ。

そこへ、ドヤドヤと皆を掻きわけて、前へ、飛び出した者があった。

「ああ、死んじまった。おせいさん、俺を残して、何故死んでしまったのだ」気が変になったように喚いているのは、クレーン係の政だった。

「オイ、政。どこへ行くんだ」政に追い縋っているのは、雲的や源太だった。

「おお、おせいちゃん。おれも、直ぐ行くよオ——」

「おい、待てと云ったら」

政は、恐ろしい力を出して、源太を投げとばすと、呀あッという間に、熔融炉キユーポラの梯子の上へ、ヒラリと飛び上った。

工場の人々は、まだ生々なまなましい惨事のあとに続いて、どんなことが起ろうとしているかを、早くも悟さとつて、戦慄せんりつの悲鳴をあげた。

「早く、あの男を捉つかまえろ！」

「引ずり下ろせ、あいつは死ぬつもりだぞ！」

「誰か、助けてえ——」

わしは、身体を動かした。邪魔になる人を押しつけて、熔融炉キユーポラの梯子の下まで来たときに、一足早く、雲的の奴が、梯子はしごに手をかけていた。

「うぬッ」

わしは、雲的を、つきとばした。

「わしが助ける」

鉄梯子に掴つかまって、上を見ると、政は、氣息奄奄きそくえんえんたる形であるが、早くも半分ばかりの高さまで登っていた。わしは、ウンと、腰骨に力を入れると、トントンと、手拍子と足拍子と合わせて、梯子をスルスルと攀のぼつていった。見る見る政とわしとの距離は、短縮され

て行つた。もう一息で、政の身体に手が届くところ、わしはツルリと、左足を滑らせた。ワツという溜息ためいきが、下の方から、聞えてきた。もう余すところは、五六尺しかない。ワンワン、ガヤガヤと、焦燥もどかしそうな群衆の声が聞える。わしは、速力スピードをグツと速めた。

気が気じやなく、上を見ると、政はすでに熔融炉キユーボラの縁ふちから上へ、上半身を出している。機チャンス会は、今を措おいて、絶対に無い。しかしわしの手は、まだ三尺下にしか届かない。

ワンワン、ガヤガヤの声も、耳に入らなくなった。

政は身体を、くの字なりに、ぐつと曲げていよいよ飛びこむ用意をした。

「やッ！」

懸声かけこえ諸共もろとも、わしは、身体を宙に浮かせて、左手ゆんでをウンと、さしのべると、ここぞと

思う空間を、グツと掴んだ。――

手応えはあつた。

工場の屋根が、吹きとぶほど大きな歓声が、ドツと下の方から湧きあがつた。

だが、こつちは、右手一本で、熔融炉の鉄梯子を握りしめ、全身を宙に跳ねあげたもんだから、左手ゆんでに政の足首を握つた儘まま、どどツと、下へ墜おちていった。右手を放しては、こ

つちが、たまらない。ガンと、横腹よこばらを、鉄梯子てつばしごに打ちつけたがそのとき、幸運にも右脚が、ヒヨイと梯子に引懸った。

(しめたツ)

と思つた瞬間、頭の上からバツサリ、熱くて重いものが、わしを、突き墜おとすように、落ちてきた。そして、呀あツという間に、ヌラヌラと、顔や腕を撫でて、下へ墜落していった。それは、政の身体だった。辛うじてわしが掴んだ政の身体だった。(これを離しては……) と私は懸命に泳こらえたが、その恐ろしい重力に勝つことが出来ず、遂ついにツルリと、わしの指の間から脱けて、あいつの身体は、ヒラヒラと風呂敷のように、コンクリートの床を目懸けて、落ちていった。いや、全くまった、政の身体は風呂敷のように、舞いながら、墜ちて行つたのだつた。わしは、どうしたものか、急に笑いたくなくて、クツ、クツ、ウフウフと、鉄梯子に、しがみついた儘まま、暫くは、動くことが出来ない程だつた。

「これは横瀬さん。珍らしいね。さア、こつちへ入ったり、入ったり」

わしは、珍客の来訪にあつて、だだっ広い、合宿の舎監居間の一室へ招じ入れた。

「今日は、何の御用かな」わしは尋ねた。

「実は一つ聴いていただきたいことがあるのでして……」横瀬は、例のモジャモジャ頭髪に五本の指を突込むと、ゴシゴシと搔いた。

「どんな話かしらぬが、言つてごらんせえな」わしはチラリと、置時計の方を見たが、もう午後十時に近かつた。

「じゃ、聴いて貰いますか」そう云つて横瀬は、莨を一本、口に銜えた。「これは、俺の知つている、或る男の、素晴らしい計画なんだ。ねえ、その男は、自分の情婦を、若い男に失敬されちまつたんだ。いや、おまけに、情婦というのが、若い男の胤を宿しちまつた。いいですか。これが普通の場合だったら、旦那どの胤だと、胡魔化せるんだが、生憎と、その旦那どのというのは、女に子を産ませる力がないことが医学的に判つているのだ。それで、胎の子を、胡魔化しようもないので、若い二人は秘かに会つて泣きながら相談した。いい智恵も見付からぬ裡に、女の身体はだんだんと隠せない程、變つてくる。とうとう仕

方なしに、胎の子には罪なことだが、墮胎だたいをすることに決心をした。若い男は、墮胎道具と、薬品を、さるところで手に入れて、女を呼びだした。二人は非常に人目を忍ぶ事情にあるというのが、これが鳥渡ちよつとでも、旦那どのの耳に入れば、二人とも殺されてしまうにきまつてる。そこで誰にも知られぬ秘密の逢あい場所というのが必要だったが、それは、たった一つあった。どこだと云うと、若い男の勤つとめている工場の、クレーンの上だった。若い男は、クレーンの運転手なんだ。工場が引けてしまうと、あの広い内部が、がらん洞どうだ。幸い女も、工場の案内を知っていた。というのが、その女も工場に働いていたのだ。女は恋しい男に逢いたいばかりに、真暗まっくらな工場に忍び入り、非常に高い鉄梯子ばしごを女の力で昇ったり、降りたりしたのだ。さて墮胎手術も、勿論もちろんその高いクレーンの上で、やることになった。若い男は教わって来たとおり、道具を女の身体に、挿さし入れて、或る薬液を注入した。それは或る時間の後になって、成功したことが始めて判った。しかし女は、暫くの間、工場を休み、病臥びようがしなければならなかった。だが折角せつかくの二人の苦心も水の泡だった。というのが、旦那どのが、女の様子から、疑惑を生じたためだった。その男は非常に嫉妬しつと深い奴やつだったが、人一倍、利口な男なので、それと色には出さず、さまざまの苦心をして、情婦おんなをめぐる疑雲ぎんうんについて、発見につとめた。鬼神きしんのような其その男は、なにも

かも知ってしまった。二人の身辺しんぺんから、歴然たる証拠も掴つかんだのだった。それより、ずっと前、旦那どのは、大体の輪廓りんかくを知ったので、憎むべき二人に対して、どんな復ふく讐しゅうをしようかと、画策かくさくした。その結果、考え出したのは、世にも恐ろしい二人の自滅じめつ計画だった。彼は、二人が墮胎を計った第九工場というのに、（夜泣き鉄骨）という怪談を植うえつけた。その実、彼がコツソリ、夜中になると、工場へ忍びこみ、自分で、クレインをキイキイ云わせたのだ。最後に、彼自身が、化物探険隊の先登せんとうに立って、真偽しんぎを確ためたが、上と下とのスイッチが、どつちも開あいているのに、クレーンが、轟ごうごう々と動いたというので、これはいよいよ、怨おん霊りょうの仕業しわざということに極きまった。その実、その旦那先生が、先に立って、一々スイッチを外はずして置いたのだ。怨霊の仕業ということになると、一番戦せんりつ慄りつを感じたのは、若い男と、例の女だ。二人とも大いに思い当るところがある。というのは、自分達が手を下して闇から闇へ送ってしまった胎児たいじの怨霊のせいに違ちがいないと思おもいこんでしまう。さア、こうなると、旦那どどの計画は、いよいよ思おもう壺つぼに嵌はまっていったというわけだ。探険の結果、これは怨霊の外ほかに、理由がつかないと決定した夜のこと、旦那どのは、夜業やぎょうをしている情婦おんなのところへ行いって、遂いに引導いんどうの言葉を渡してきた。それは、のつびきならぬ証拠を手に入れたので、明日になったら、警察へ告発

するぞと脅おどしたのだ。情婦は、思い余あまつて、自殺の意を決し、自分の働いている工場の熔キ融ユ炉ポラに飛びこんで、ドロドロに熔とけた鉛なまりの湯の中に跡あと方もなく死んでしまった。こんどは、若い男の番だった。旦那どのは、探險隊の中に、その男を入れることを忘れなかつた。若い男を、ジリジリと苦しめてゆくのが、たまらなく快感を唆そそつたのだつた。若い男は、クレーンが独ひとりで動き出す大恐怖だいきようふの前に、永い間、ひき据すえられていた。更に、戦せ慄りんを禁きんじ得えないクレーンの上へ、引張り上げられたり、又降ろされたりした。そこへ、突如として、女の自殺を聞いた。それには旦那どのも遽あわてた位だ。若い男は、女の飛込んだ熔融炉目懸けて、駈け出して行つた。彼も女の跡を追つて、この炉の中で死のうと決心した。そう思うと、彼は脱兎だつとのように熔融炉の鉄梯子を、かけ上つたのだ。友人の一人が助けようとして、後から上ろうとすると、そこへ旦那どのが、飛び出して、彼をつきとばした。そして、旦那どのは、恨うらみ重なる男のあとにつづいて梯子を上って行つたのだ。これを見ていた人々は喝かつさい采さいした。それもそうだろう。いやたつた一人を除いてはネ。そいつは、工場の隅すみから、コツソリこの場の光景を眺めていた俺によく似た男さ、はッはッはッ。だが、その男にも、旦那どこの復讐ふしうが、どのように行われるのか、見当がつかかなかつた。ひよつとすると、旦那どのは、わざと梯子昇りの速スピード力を落として、（残念ながら、

追いつけなくて、若い男を殺してしまった！」と云いわけするのかと思っていたが、見ていると、どうやら、そうではない。いや、それは、鬼のように恐ろしい計画だった。旦那どのの考えは若い男が一旦飛び込んで、熱鉛のため赤爛れに爛れたところで若い男の死骸をひっぱり出すことであつた。俺は旦那どのが、梯子の上で嬉しそうに笑っているのに感付いた唯ゆい、いっ一いつの人間だつたかも知れない。若い男は、彼の手を離れて、コンクリートの床の上に叩きつけられたが、二た眼と見られた態さまじやなかつた。旦那どのは、別に咎とがめられもしなかつた」

「面白い話だなア、若わけえの」わしは、静かに云つた。「だが一つ腑ふに落ちねえことがあるから尋ねるが、探険隊が工場の暗闇の中にいたとき、クレーンが轟ごうごう々と動いた。直ぐ灯あかりをつけたが、下のスウィッチは外はずれていた。いくら其の悪人が器用でも、電気なしで、あのクレーンは動かせないだろうぜ」

「そんなトリックに気がつかない俺ではないよ。その旦那どのは、クレーンを動かすスウィッチと、同じ型の、ソレ乙おつがた型スウィッチよ、あれを工場の栗原さんから借りて、暗闇で音をたてずスウィッチの開閉をすることを練習したんだ」

「出鱈目でたらめを云うな」

「出鱈目ではない。では、証拠を出そうかね。その旦那どのは、工場の入口と、スイッチチまでの距離と、その取付けの高さとを正確に測つて来て、この舎監居間の前の廊下に、それと同じ遠えんきん近に、借りて来たスイッチチをひっかけ、真夜中になると、暗闇の中で、練習をしたのだ。嘘と思うなら、舎監居間の戸口から六間先き、廊下から六尺の高さのところ、二本の釘跡くぎあとがあるが、その寸法と、工場のスイッチチの位置とを較べて見ねえ。ぴつたりと同じことだ。それから二本の釘の距離は、その旦那どのが借りていたスイッチチの二つの孔の間隔あなかんかくと同じことだが、実はそのスイッチチは製作の際に間違えて、孔の間隔を広くしすぎたので、この廊下の釘の距離も、普通のスイッチチには見られない特別の間隔かんかくになっている筈だ。ここらも、宿命しゆくめいてき的な証拠といえれば言えるだろう。ウン、ぎやーツ」

わしの手には、お喋り探偵の脳のうてん天を叩き破つたハンマーが、血にまみれて、握られていた。それは、彼氏がお喋りに夢中になつている間に、卓子テーブルの蔭から、コツソリ取出したものだつた。だが、此この男を殺してしまつたお蔭で、隠忍いんにん十年、殺人癖さつじんへきから遠去かつていた此このわしの身体には、久しく眠つていた悪血あくけつが、一時に飢えうに目覚めて、湧わきあがつてきたようだ。わしの名か？ 「片眼の岩いわ」と云やア、ちつとは人に知られた吾わがま

儘^ま者^{もの}
だ
な
了。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1932（昭和7）年8月号

※底本の「cc」は「※[#全角CC、1-1353]」で入力しました。

※「わし達の周《まわ》りには、「の「わし」にのみ、傍点がないのは底本通りです。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜泣き鉄骨

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>